

令和 6 年 6 月 10 日現在

機関番号：32614

研究種目：基盤研究(C)（一般）

研究期間：2021～2023

課題番号：21K11367

研究課題名（和文）日本の奉納競技の近代的展開に関する研究 神社・皇室とスポーツ文化との関係

研究課題名（英文）A Study on the Modern Development of Japanese sport dedicated to Jinja (Shinto shrines):Relationship between Jinja (Shinto shrines), the Imperial House and Sport Culture

研究代表者

藤田 大誠 (Fujita, Hiromasa)

國學院大學・人間開発学部・教授

研究者番号：20407175

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 2,500,000円

研究成果の概要（和文）：本研究では、体育・スポーツ史と神道史、皇室史とを架橋する視座のもと、「日本の奉納競技」の近代的展開について実証的に検討した。
具体的には、明治神宮外苑の伝播過程と明治神宮大会の通史的研究を通して、神社・皇室と密接な日本スポーツ文化は、「神社+奉納競技+体育・スポーツ施設」という独自の構造を有してきたことを明らかにした。
研究成果として、「都市としての明治神宮（内苑・外苑）」モデルの展開、伝播、変容の歴史と明治神宮大会の通史をまとめ、「奉納競技」「天覧試合」の基礎データを作成した。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究は、体育・スポーツ史と神道史、皇室史を架橋する視座のもと、「奉納競技」としての「神前（祭典）スポーツ」の近代的展開や神社・皇室との密接な関係という、これまでになく観点から総合的研究を進め、日本スポーツ文化の特質と構造の一端を解明したという点で、主に近代日本体育・スポーツ史研究の進展に寄与する成果となるであろう。
また、本研究における「奉納競技」や神社・皇室との関係からスポーツ文化を検討する視点は、国際比較研究を行う上でも共有可能な方法になり得るとともに、その成果は、国内的・国際的両文脈が交差してきた日本スポーツ文化の内実について、国内外社会に情報発信する際に有益な知見になると思われる。

研究成果の概要（英文）：In this study, the modern development of "Japanese sport dedicated to Jinja" was empirically examined from the perspective of bridging the history of sport with the history of Shinto and the Japanese Imperial House.
Specifically, through a comprehensive historical study of the Meiji Jingu Gaien and the spread of Meiji Jingu Taikai (Meiji Jingu National Athletic Meeting), it became clear that Japanese sport culture, which is closely linked to Jinja and the Japanese Imperial House, has a unique structure consisting of Jinja, sport dedicated to Jinja, and physical education and sports facilities.
As a result of the research, the study compiled the history of the development, spread, and transformation of the "Meiji Jingu (Naien and Gaien) as a city" model and a general history of Meiji Jingu Taikai, and created basic data on the "Japanese sport dedicated to Jinja" and Tenran game.

研究分野：近代神道史、国学、日本教育史、体育・スポーツ史

キーワード：日本の奉納競技 神社 皇室 スポーツ文化 明治神宮外苑 明治神宮大会 神前（祭典）スポーツ 天覧試合

1. 研究開始当初の背景

これまで「スポーツ文化」を対象としてきた体育・スポーツ史やスポーツ人類学、スポーツ社会学では、スポーツと宗教・儀礼との関係について、両者の共通性やスポーツの起源、「筋肉のキリスト教」などの観点から優れた研究を蓄積してきた。特に、クーベルタンが創始した近代オリンピックの前提である古代ギリシャのオリンピア祭（古代オリンピック）がその典型であったように、舞踊や格闘技、競走、競馬などの各種スポーツが「奉納競技」としての「神前（祭典）スポーツ」に起源を持つ場合が多かったことは、スポーツ史の概説書でも度々指摘されている（寒川恒夫編『図説スポーツ史』朝倉書店、1991年など）。

日本のスポーツ文化も例外ではなく、我が国の競馬や相撲、弓術、剣術、蹴鞠などは、専ら宮廷や「奉納競技」として神社境内で行われてきた。夙に民俗学者柳田國男は「我国在来の運動競技」の殆ど全部が「祭の日の催し」に始まると指摘している（『日本の祭』弘文堂、1942年）。さらに今村嘉雄は、明治天皇・昭憲皇太后を祀る明治神宮の外苑競技場が造営されたことに伴って大正13年（1924）に創始された「明治神宮大会」を「日本民族の大古からの遺習である神前スポーツの近代版」と位置づけ、古代オリンピア祭典競技との類似性に言及した（『日本体育史』不昧堂書店、1970年）。だが従来、スポーツ史の「明治神宮大会」研究は神社や皇室に関する記述が不十分で、他方、神道史や皇室史からの明治神宮研究は逆にスポーツへの関心が乏しく、いずれも柳田や今村の視点は十分に深められては来なかった。

かかる学術的背景を踏まえ、日本のスポーツ文化の特質と構造を解明するためには、スポーツ科学の人文・社会科学研究と神道史、皇室史とを架橋する視座を確保した上で、明治神宮外苑と明治神宮大会の検討を軸とする「日本的奉納競技」の近代的展開に関する総合的研究が必要不可欠ではないか、というのが本研究課題の核心をなす学術的「問い」である。

2. 研究の目的

本研究の目的は、スポーツ科学の人文・社会科学研究と神道史、皇室史とを架橋する視座から、神社・皇室と密接な日本スポーツ文化の特質と構造を解明することにある。

具体的には、近代日本の①体育・スポーツ空間（明治神宮外苑）と②スポーツ競技・体育・錬成（明治神宮大会）の通史的考察に加え、③全国各地の神社境内などにおける「奉納競技」と天皇・皇族の「天覧（台覧）試合」に関する諸記録の蒐集に基づき基礎データを作成し、「日本の奉納競技（神前・祭典スポーツ）」の近代的展開を実証的かつ総合的に解明するものである。

3. 研究の方法

本研究の方法は、主に近代日本の体育・スポーツ空間とスポーツ競技・体育・錬成に焦点を当てて歴史的研究を行い、神社・皇室とスポーツ文化との関係を実証的かつ総合的に解明するというものである。具体的には、下記三点の研究方法によって研究を推進する。

①「都市としての明治神宮（内苑＋外苑）」の生成、展開、伝播という視点の導入

「日本の奉納競技」の近代的展開を最大規模に体现した空間として、大正13年（1924）竣工の競技場（現・国立競技場）が中心の一大スポーツコンプレックス「明治神宮外苑」がある。明治天皇・昭憲皇太后を祭神とする明治神宮（同9年創建）は、社殿や鎮守の森を持つ狭義の神社境内としての「内苑」に加え、文化・スポーツ施設を含む附属空間として同15年に竣工した「外苑」を設けた初の神社であり、本研究応募者はかつて、「都市としての明治神宮」が出現したことの画期性を指摘した（藤田大誠「神社から見た渋谷」、石井研士編著『渋谷の神々』雄山閣、2013年）。本研究では、この「都市としての明治神宮」という独自の視点を本格的に導入して、その形成過程と展開、空間方式の伝播（札幌神社や樫原神宮などのスポーツ施設）について具に解明する。

②神道史や皇室史を十分に踏まえた「明治神宮大会」に関する初めての詳細な通史的研究

大正13年（1924）から昭和18年（1943）まで明治神宮外苑競技場を主会場として開催され、戦後の「国民体育大会」の前提ともなった「明治神宮競技（体育・国民体育・国民錬成）大会」（名称の変遷があるため、以後「明治神宮大会」と表記）については、スポーツ科学の人文・社会科学研究による一定の研究蓄積がある。しかし、その多くは近代の神社や皇室に関する事項や史実の正確な記述を欠き、また、簡潔な概観や部分的考察はあるが、14回に亘る「明治神宮大会」の創設から展開、終焉に至るまでの詳細な通史的研究は未だ登場していない。それ故、本研究では、スポーツ科学の人文・社会科学研究と神道史、皇室史を架橋する視座から、その前史と後史をも視野に入れつつ、ダイナミックな変遷を歩んだ「明治神宮大会」に関する詳細な通史的研究をまとめ、初めてその全体像を明らかにする。

③日本全国の「奉納競技」「天覧（台覧）試合」諸記録の蒐集による基礎データ作成

全国各地における神社の「奉納競技・演武（舞）」や天皇行幸による「天覧試合」、秩父宮はじめ皇族の「台覧試合」の諸記録について、本研究では、スポーツ科学の人文・社会科学研究による諸成果を集積した上で、神社・皇室関連書籍や新聞・雑誌記事、公文書などの中から幅広く資料蒐集を行って、従来試みられてこなかった近代日本における「奉納競技」と「天覧（台覧）試合」に関する基礎データを作成、公開し、研究者の便に供する。

4. 研究成果

本研究では、研究計画の三本柱である①「明治神宮外苑」体育・スポーツ施設の伝播に関する研究、②「明治神宮大会」に関する通史的研究、③「奉納競技」「天覧（台覧）試合」に関する基礎データ作成に即して研究推進を行い、下記の研究成果が得られた。

公表した研究成果は、図書（執筆者として参加、単著論文、単著コラム執筆）1冊、雑誌論文5本（全て単著、うち査読付論文3本）、座談会記録1本、学会発表7回（全て単独の口頭発表）、公開シンポジウム発表1回（単独の口頭発表）である。

図書としては、高嶋航・佐々木浩雄編『満洲スポーツ史—帝国日本と東アジアスポーツ交流圏の形成—』（青弓社、令和6年1月23日）に執筆者として参加し、論文（第8章）「満洲国」スポーツ界と明治神宮大会」とコラム8「満洲の神社と体育・スポーツ施設」を公表した。

雑誌論文（全て単著）としては、「國學院大學運動部活動史研究序説—近代日本における学生スポーツの一事例として—」（『國學院大學人間開発学研究』第13号、令和4年2月、査読有）、「明治期における國學院の運動部活動—國學院同窓會の体育部から運動部への展開—」（『國學院大學校史・学術資産研究』第15号、令和5年3月）、「明治神宮大会の展開と満洲スポーツ界」（『國學院大學研究開発推進センター研究紀要』第17号、令和5年3月）、「樞原神宮外苑の形成と体育・スポーツ施設—日本的奉納競技空間の近代的展開—」（『明治聖徳記念学会紀要』復刊第60号、令和5年11月、査読有）、「国民体育」から「国民錬成」へ—総力戦体制下の明治神宮大会—」（『國學院大學人間開発学研究』第15号、令和6年2月、査読有）を公表した。

座談会記録としては、藤田大誠（企画、司会）・木下秀明・中村哲夫・山田佳弘・中嶋哲也・藤本頼生「スポーツ文化と神道文化」（『神道文化』第33号、令和3年6月）を公表した。

学会発表（全て単独による口頭発表）としては、「國學院大學運動部活動史研究序説—近代日本における学生スポーツの一事例として—」（國學院大學人間開発学会第13回大会研究発表、於國學院大學、令和3年11月13日）、「帝国日本の神社と体育・スポーツ施設—満洲における明治神宮外苑に対する眼差し—」（スポーツ史学会第35回大会一般研究発表、オンライン開催〔担当校：日本体育大学〕、令和3年12月5日）、「過渡期としての「明治神宮体育大会」の展開」（体育史学会第11回大会一般研究発表、於東京学芸大学、令和4年6月4日）、「国民体育」から「国民錬成」へ—総力戦体制下の明治神宮大会—」（教育史学会第66回大会研究発表、オンライン開催〔開催校：埼玉大学〕、令和4年9月25日）、「近代日本の高等教育機関における運動部活動に関する一考察—大正・昭和戦前期の國學院大學を事例として—」（國學院大學人間開発学会第14回大会研究発表、於國學院大學、令和4年11月12日）、「日本的奉納競技空間の近代的展開—樞原神宮外苑の形成と体育・スポーツ施設—」（スポーツ史学会第36回大会一般研究発表、於奈良教育大学、令和4年12月4日）、「昭和戦前期におけるスポーツ人類学的著作の先駆とその背景—刈屋卓一郎『スポーツの由來とその轉化』の序説的考察—」（日本スポーツ人類学会第24回大会研究発表、発表方法：リモート〔主管：筑波大学、会場：文部科学省研究交流センター〔つくば市〕〕、令和5年3月16日）を行った。

公開シンポジウム発表（単独口頭発表）は、「満洲スポーツ界と明治神宮大会」（公開シンポジウム「満洲国とスポーツ」発表、オンライン開催、令和3年12月26日）を行った。

①「明治神宮外苑」体育・スポーツ施設の伝播に関しては、主に樞原神宮（及び奈良県立図書館情報館）所蔵資料の現地出張調査を軸に各種関連文献・資料の複写蒐集、整理を網羅的に行って実証的分析を進め、「樞原神宮外苑」形成過程に関する学会発表と論文に結実させた。

また、近代日本（帝国日本）の「外地」たる満洲における神社と体育・スポーツ施設との関係については、学会発表、コラム執筆を行った。さらに北海道神宮所蔵資料の現地出張調査をはじめ各種関連文献・資料の複写蒐集、整理を網羅的に行い、実証的分析を進めた「札幌神社外苑」の形成過程については、研究業績の一つとして位置付けてはならないものの、少人数の共同研究による内々の研究会である第30回満洲スポーツ史研究会（於札幌大学、令和5年9月4日）において「札幌神社外苑における体育・スポーツ施設の形成と展開」と題する口頭発表を行ったが、本研究課題の助成期間中には、学会研究発表や論文を作成するまでには至らなかった。

これらの研究成果によって、「日本の神前（祭典）スポーツの近代的展開」を生み出した空間としての（神社＋奉納競技＋体育・スポーツ施設）という組み合わせ、特に「都市としての明治神宮（内苑・外苑）」という体系、モデルの伝播、移植、変容という現象は、樞原神宮や札幌神社をはじめとする内地の事例のみならず、満洲を含む帝国日本の外地においても多数見出せること、但しその形態は一樣ではないことが明らかになった。しかしながら、札幌神社や明治神宮外苑競技場の前史となる空間を持つ靖國神社、彌彦神社、皇學館大学の競技場に関する史料調査、分析にも聊か取り組んだものの、研究成果として公表するまでには至らなかったため、それぞれ学会発表や論文の公表に結実させることが今後の課題である。

②「明治神宮大会」に関する通史的研究に関しては、網羅的に蒐集した関連史料を分析する中で、主に「外地」たる満洲スポーツ界（関東州、満洲国）と明治神宮大会との関係を通史的に検討し、公開シンポジウム発表や学会発表を行い、これまで類例の無い通史的論文を公表した。

その成果を要約すると次の如くである。満洲国建国の以前・以後を通して、満洲スポーツ界（関東州、在満教務部、満洲国の三代表を含む）からの明治神宮大会への眼差しを窺うと、満洲スポーツ界にとって、特に在満「日本人」選手にとって明治神宮大会とは、一貫して最も権威のある運動競技（スポーツ、武道、体操）大会であり、憧れの対象、晴れの場であった。しかし、満洲

スポーツ界にとってより重要であったのは、専ら競技水準や国際スポーツの観点から重視された国際オリンピック大会や極東・東亜大会などとは異なり、明治神宮大会は、競技水準もさることながら、その祭典奉納競技（神前スポーツ）性をはじめ、施設・環境、ルール（競技規定）なども含めて、日本における国民的・全国的・総合的競技大会という在り方そのものが模範とされるべき対象であったことにある。当然、その前提としては、満洲スポーツ界と日本内地スポーツ界の在り方を比較、検討するための貴重な機会として明治神宮大会を捉えていた。満洲スポーツ界は、明治神宮大会参加に当たって結局関東州、在滿教務部、満洲国の三代表に分かれたものの、「東亜新秩序」から「大東亜共栄圏」という理念の変遷を伴いつつ決戦下に突入する国際情勢を背景として複雑に展開する明治神宮大会の渦中で、総じて同大会への眼差しを更新し続け、さらには参加して経験を積んで行くことによって、それぞれ自己の在り方を照らし返していた。また、満洲国において結局、「建国神廟」を冠する大会が実現しなかったことについて、最終的に満洲国政府が重視、優先したのは明治神宮大会への従属ではなく、「満洲国基本国策大綱」に基づく国内の「国民錬成」であり、満洲国の「国民錬成大会」構想は、「神社、競技場、競技会が一体となり階層化された状態」とみる「明治神宮大会体制」論では理解できないことも指摘した。

なお、「内地」を軸とする明治神宮大会の通史的研究については、「明治神宮体育大会」、「明治神宮国民体育大会」、「明治神宮国民錬成大会」の各時期を個別に研究対象とした学会発表や論文に結実させた。とりわけ、大正13年（1924）から昭和19年（1944）まで14回に亙り開催された明治神宮大会の総力戦体制下における内実を再検討するため、当時のキーワード「錬成」に着目し、明治神宮大会の展開を総括した。その研究成果の概要は下記の如くである。

明治神宮大会において「錬成」の語は、「明治神宮体育大会」末期から使われ始め、「明治神宮国民体育大会」時代には、定型表現として慣習化した使用方法ではあったが存在感を示し続けて定着し、遂には「明治神宮国民錬成大会」という名称にまで前景化するに至った。厚生省が大会名称を「国民体育」から「国民錬成」へと改めたのは、決戦下における「国民体育」概念の拡張に基づき、全国民を対象とした〈「体育」即「練武」＋「修文」＝「国民錬成」〉という認識によるものであった。銃後「全国民」による「健民錬成」と「居常錬成」の意義は強調されたが、種目内容について抜本的変革がなされたとは言えなかった。スター選手の活躍に頼ってスポーツの競技性を前面に打ち出す大会から、日常生活に重点を置いた体育が強調され、国民全般が広範囲に参加する挙国的大会へと移行するという大きな転換は、すでに厚生省が主催を始めた「明治神宮国民体育大会」時代に生じていた。先行研究では専ら、総力戦体制下において「錬成」の語が前景化するに反比例してスポーツの排除が進められたことを強調してきたが、戦時体制が強化されるにつれ、英米的価値観を代表するとされたスポーツの実施は急激に縮小されていくため、概ねその通りではあるものの、明治神宮国民錬成大会の方針や実施結果を見ると、実際にはスポーツ競技性は抹殺まではされず、根強く残存し続けたのである。

当時の厚生省は、なぜ明治神宮大会の名称にも冠されることとなった「錬成」の名のもとで、スポーツ的競技性を払拭することが出来なかったのか。

第一に、明治神宮大会において厚生省が、「錬成」概念を「体育」や「スポーツ」、「運動競技」などの意義を完全に塗り替えるほどの独自の理念として最後まで打ち出すことが出来ず、実質的にはこれらの概念を曖昧に包括する語として作用したのみで、結局「鍛錬」や「練磨」などの類似語との大きな差が示せなかったことにある。確かに「国民錬成」大会となった第13回大会では、銃後「全国民」による「健民・居常錬成」の意義が強調されて挙国的な戦時大会の色をより濃くしたものの、スポーツ的競技の一掃には着手していない。また、最後の第14回大会（秋季・冬季大会）では、スポーツ的競技性の無い演練に留まらざるを得なかったとはいえ、これは戦局悪化が極まって殆ど否応なく変更された結果であり、当初の実施方針では、種目内容の抜本変革は考えられてはいなかった。

第二に、明治神宮大会の由来に基づく、〈日本の奉納競技（神前スポーツ）の近代的展開〉という同大会の根本的性格による。そもそも同大会創設に当たって必須の前提とされた「明治神宮外苑競技場」は、神社祭祀に伴う奉納行事のための「馬場」（競馬場）という日本の文脈による神社境内の近代的展開の上に誕生した施設であるとともに、「近代オリンピック」の価値を見据えた国際的文脈に基づく近代的な体育・スポーツ施設でもあり、両文脈の結節点に位置付く奉納競技空間として造営された。さらに言えば、同大会は、夙に嘉納治五郎が提起し、内務省衛生局の官僚（山田準次郎衛生局長、湯澤三千男保健課長、氏原佐蔵技師）が具体化した総合的運動競技大会構想が、日本における「オリンピックゲーム」（古代ギリシャの神前競技である「オリムピア祭」、「オリムピヤード」に準えられた）、かつ明治天皇の神霊に対する明治神宮「神前の催し」と位置付けられた「明治神宮競技大会」（神宮競技）として結実したものであった。要するに同大会は、その出発点から、日本の伝統と西洋的伝統を含む極めてハイブリッドな奉納競技的性格を持つが故に、当初から欧米由来のスポーツ競技と日本の武道試合が同居してきたのである。同大会は、約20年間の複雑な変遷の中で様々な要素が加味され、時局に応じて内容も展開してきたが、その創設由来に基づく〈奉納競技〉性を自らの方針で消失させてしまうことは「神宮競技」という根本的性格を否定することになりかねず、それは総力戦体制下の「錬成」概念を以てしても難しかったと言わざるを得ない。

戦局が極まるにつれて殆ど火が消えてしまった状態に陥る日本のスポーツ的競技性ではあったが、それが消極的ながらも明治神宮大会に残存してきた意義について、本研究では、14回に亙る明治神宮大会の複雑な歩みから改めて丁寧に問い直す作業の必要性を提起したのである。

本研究によって、「日本的奉納競技」の近代的展開という観点から、曲がりなりにも明治神宮大会の通史を描くことは出来たが、同大会は様々な視角から検討する余地を未だ数多く残しており、課題も山積している。特に最も長い時期の大会名称であった「明治神宮体育大会」（明治神宮体育会主催）時代を「過渡期」とすると学会発表では捉えたが、本研究の助成期間中には個別論文の公表にまでは至らなかった。今後、より精度を高めた史的研究が必要である。

③「奉納競技」「天覧（台覧）試合」に関する基礎データ作成については、諸記録の蒐集、分析を進め、「奉納競技」「天覧（台覧）試合」に関する基礎データをまとめた。

また、諸記録の蒐集、分析を進める中で、特に神道や皇室との関係が深い國學院大學における運動部活動史を検討するための必須資料を所蔵する埼玉県立図書館〔熊谷図書館〕の現地調査、複写蒐集を行い、これまで専論の無かった、神道精神を建学の精神とする国学的研究・教育機関である伝統私学の國學院大學における運動部活動史を検討し、学会発表、論文に結実させた。

さらに、「奉納競技」に関する研究史整理の一環として、刈屋卓一郎『スポーツの由來とその轉化』（日刊工業新聞社出版部、昭和11年）という、スポーツ人類学の先駆的存在と位置付けるべきテキストが生み出された社会的背景について、体育学・スポーツ科学の人文・社会科学的研究と神道史とを架橋する観点から検討に取り組み、序説的考察として学会発表を行った。これについても今後、論文化を目指す所存である。

本研究では、総仕上げとして、①「都市としての明治神宮」の視点に基づく「明治神宮外苑」の体育・スポーツ空間研究、②「明治神宮大会」に関する通史的研究、③「近代日本の「奉納競技」「天覧（台覧）試合」基礎データ」の三つの内容を含む本研究の『研究成果報告書』（PDFファイル）を作成した。なお、大部に互るため、現時点では冊子ではなくデータ（PDFファイル）として作成、保存する方が有効と判断し、当初想定していた報告書の印刷製本は見送った。

以上の如く、本研究では、体育・スポーツ史と神道史、皇室史とを架橋する視座のもと、「日本的奉納競技」の近代的展開について実証的に検討し、明治神宮外苑の伝播過程と明治神宮大会の通史的研究を通して、神社・皇室と密接な日本スポーツ文化は、〈神社＋奉納競技＋体育・スポーツ施設〉という独自の構造を有してきたことを明らかにした。具体的な研究成果としては、「都市としての明治神宮（内苑・外苑）」モデルの展開、伝播、変容の歴史と明治神宮大会の通史をまとめ、「奉納競技」「天覧（台覧）試合」の基礎データを作成した。「奉納競技」としての「神前（祭典）スポーツ」の近代的展開や神社・皇室との密接な関係という、これまでにない観点から総合的研究を進め、日本スポーツ文化の特質と構造の一端を解明したという点で、主に近代日本体育・スポーツ史研究の進展に寄与する成果となるであろう。また、本研究における「奉納競技」や神社・皇室との関係からスポーツ文化を検討する視点は、国際比較研究を行う上でも共有可能な方法になり得るとともに、その成果は、国内的・国際的両文脈が交差してきた日本スポーツ文化の内実について、国内外社会に情報発信する際に有益な知見になると思われる。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計6件（うち査読付論文 3件/うち国際共著 0件/うちオープンアクセス 6件）

1. 著者名 藤田大誠	4. 巻 復刊第60号
2. 論文標題 橿原神宮外苑の形成と体育・スポーツ施設 日本の奉納競技空間の近代的展開	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 明治聖徳記念学会紀要	6. 最初と最後の頁 46-72
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 藤田大誠	4. 巻 第15号
2. 論文標題 「国民体育」から「国民錬成」へ 総力戦体制下の明治神宮大会	5. 発行年 2024年
3. 雑誌名 國學院大學人間開発学研究	6. 最初と最後の頁 1-19
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 藤田大誠	4. 巻 第15号
2. 論文標題 明治期における國學院の運動部活動 國學院同窓會の体育部から運動部への展開	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 國學院大學校史・学術資産研究	6. 最初と最後の頁 1-30
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 藤田大誠	4. 巻 第17号
2. 論文標題 明治神宮大会の展開と満洲スポーツ界	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 國學院大學研究開発推進センター研究紀要	6. 最初と最後の頁 25-89
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 藤田大誠	4. 巻 第13号
2. 論文標題 國學院大學運動部活動史研究序説－近代日本における学生スポーツの一事例として－	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 國學院大學人間開発学研究	6. 最初と最後の頁 1-14
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 藤田大誠・木下秀明・中村哲夫・山田佳弘・中嶋哲也・藤本頼生	4. 巻 第33号
2. 論文標題 [座談会] スポーツ文化と神道文化	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 神道文化	6. 最初と最後の頁 16-49
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

〔学会発表〕 計8件 (うち招待講演 0件 / うち国際学会 0件)

1. 発表者名 藤田大誠
2. 発表標題 過渡期としての「明治神宮体育大会」の展開
3. 学会等名 体育史学会第11回大会一般研究発表 (於東京学芸大学、令和4年6月4日)
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 藤田大誠
2. 発表標題 「国民体育」から「国民錬成」へ 総力戦体制下の明治神宮大会
3. 学会等名 教育史学会第66回大会研究発表 (オンライン開催、開催校：埼玉大学、令和4年9月25日)
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 藤田大誠
2. 発表標題 近代日本の高等教育機関における運動部活動に関する一考察 大正・昭和戦前期の國學院大學を事例として
3. 学会等名 國學院大學人間開発学会第14回大会研究発表（於國學院大學たまプラーザキャンパス、令和4年11月12日）
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 藤田大誠
2. 発表標題 日本的奉納競技空間の近代的展開 榎原神宮外苑の形成と体育・スポーツ施設
3. 学会等名 スポーツ史学会第36回大会一般研究発表（於奈良教育大学、令和4年12月4日）
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 藤田大誠
2. 発表標題 昭和戦前期におけるスポーツ人類学的著作の先駆とその背景 刈屋卓一郎『スポーツの由來とその轉化』の序説的考察
3. 学会等名 日本スポーツ人類学会第24回大会研究発表（発表方法：リモート、主管：筑波大学、令和5年3月16日）
4. 発表年 2023年

1. 発表者名 藤田大誠
2. 発表標題 國學院大學運動部活動史研究序説－近代日本における学生スポーツの一事例として－
3. 学会等名 國學院大學人間開発学会第13回大会研究発表（於 國學院大學たまプラーザキャンパス）
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 藤田大誠
2. 発表標題 帝国日本の神社と体育・スポーツ施設－満洲における明治神宮外苑に対する眼差し－
3. 学会等名 スポーツ史学会第35回大会一般研究発表（オンライン開催、担当校：日本体育大学）
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 藤田大誠
2. 発表標題 満洲スポーツ界と明治神宮大会
3. 学会等名 公開シンポジウム「満洲国とスポーツ」発表（オンライン開催、基盤研究（B）「帝国日本と東アジアスポーツ交流圏の形成」〔研究課題／領域番号18H00722、研究代表者：高嶋航〕）
4. 発表年 2021年

〔図書〕 計1件

1. 著者名 高嶋 航・佐々木 浩雄編	4. 発行年 2024年
2. 出版社 青弓社	5. 総ページ数 378
3. 書名 『満洲スポーツ史 帝国日本と東アジアスポーツ交流圏の形成』（藤田大誠執筆：第8章「満洲国スポーツ界と明治神宮大会」〔291-319頁〕、コラム8「満洲の神社と体育・スポーツ施設」〔320-322頁〕）	

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
---------------------------	-----------------------	----

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------